ソーシャルワーク研究会公開ＺＯＯＭミーティング資料（２０２０年１０月）

北島　英治

（以下は、「２０２０年１０月公開ＺＯＯＭミーティング資料」をまとめるため、筆者の『グローバルスタンダードにもとづくソーシャルワーク・プラクティス』（２０１６年、ミネルヴァ書房）と『保健の科学３』（２０１７年、Ｖｏｌ．５９）とその他関連の原稿をもとに作成したものです。）

Ⅰ．例：地域包括ケアシステムとソーシャルワーク

ソーシャルワーク・プラクティスの理論について議論する前に、なぜ、「理論」を考えることが重要であるかを示しめしておこう。“保健”と“福祉”という二つの言葉がよく併記されているの見かける。これとよく併記される別の言葉に、“医療”があり、“医療・保健・福祉”と３つ並べて語られることもある。それぞれの言葉は、その医療制度と医療専門職、その保健制度と保健専門職、そして、その福祉制度と福祉専門職を意味している。また、それら制度と専門職の対象としての人々、その家族、その人たちが住む地域（住民、組織、機関、施設）がある。今回の学会シンポジュムのテーマの中には、“地域包括ケアシステム”と“相談支援”という二つのキー・ワードも見られる。ここでは、この“包括”を、その地域における“相談支援”において、“医療・保健・福祉”を“包括”するという意味にとらえて、以下議論してみる。

１．“最初に、「ひとびと」を考えよう！（People, First!）”

特に、その三つの中の“福祉”の立場から地域包括ケアシステムにおける「ソーシャルワーク」に焦点をあてることとする。“病気をかかえている人（a person with illness）”がある＜専門職（professional）＞の“ケア（care）”の対象になるとき、その“人（a person）”は、「患者（a patient）」と呼ばれる。その“ケア”は「医療・治療（行為）（professional of medicine）」と言い、その専門職は“医療専門家”と呼ばれる。“病気と健康にかかわる事柄”が、“ケア（care）”の対象になるとき、その専門職は“保健専門家”と呼ばれる。他方、その“病気をかかえている人”や“病気と健康にかかわる事柄をかかえている人”が、ある別の＜専門職＞の“ケア”の対象になるとき、その“人”は、「利用者／クライエント（a user/client/stake-holder）」と呼ばれるようになる。その“ケア”は、「福祉サービス専門家（professional of health/care/social service）」であり、その専門職は“福祉専門家”と呼ばれる。先述したように、以下、“福祉”の立場から、その“福祉サービス”を話題とする。つまり、専門サービスの対象者が「利用者／クライエント（a user/client/stake-holder）」と呼ばれ、その地域包括“ケア（システム）”は「専門サービス」（professional service）」で

あり、その“福祉専門家（professional of social service/social work practice）”の“相談支援”の「専門性（profession）」に関し、そこでここでは特に、社会福祉における専門職である「ソーシャルワークの立場」から考えみる。

“病気をかかえている人”を「患者」として、その病気を診断し治療し、福祉専門家は、“障害のある人”を「障害者」として、その障害に応じて、専門サービスを実践し、また、介護専門家は、ある“高齢者”を、「要介護者」として、その要介護度を判断し、要介護度に応じて、介護の計画・実践する一方で、他方では、「認知症“患者”」「障害“者”」「要介護“者”」の“者（人）”を後にもってくるのではなく、先に、その“人（者）”、その“人々（者）”を見ていこう、というのである。社会福祉とソーシャルワークにおいて、あらた見方や考え方が発展してきている。というより、従来からあったものが、“グローバル”な装いをもって、語られるようになってきたとも言える。社会福祉とソーシャルワークの立場から、“A Person, First!”“People, First!”、つまり、“最初に、「人（A Person/Human-being）」を見よう！”“最初に、「人々（People）」を考えよう！”と言われるようになってきている。「認知症“患者”」「障害“者”」「要介護“者”」と“者（人）”を後にもってくるのではなく、先に、その“人（者）”、その“人々（者）”を見ていこう、というのである。

たしかに、病気や障害や日常生活困難程度による“その人は、なにができないか”を判断し、専門家としてかかわることは重要である。その一方で、“その人は、なにができるか”を判断し、専門家としてかかわることも重要である。ここでいう、“A Person, First!”“People, First!”、つまり、“最初に、「人（A Person/Human-being）」を見よう！”“最初に、「人々（People）」を考えよう！”というのは、“その人は、なにができても、”、そして、“その人は、なにができなくても”、「認知症“患者”」「障害“者”」「要介護“者”」の、その「認知症」「障害」「要介護」を見るだけでなく、“その「人（者）」を、その人のままに（人の尊厳）”に、最初に見よう。それを、社会福祉専門職の専門価値（professional value）とし、専門サービスである“相談支援”をしていこうというのである。

“できるようになること”が、“良いこと”であり、“できなくなること”が“悪いこと”であるというのではなく、“できなくなっていけば、その人のまま”に、専門家としてかかわりつづける。「認知症」「障害」「要介護」が、良くなっても、悪くなっても、その人を、その人のままに、専門家として“相談支援”していく。“良くなること：病気が治ること、機能が回復すること”、“悪くなること：病気が重くなる、機能を失っていく”として、「認知症（患）“者”」「障害“者”」「要介護“者”」として、その人をとらえるだけではなく、今、そこで、“その人のあるがまま”に、その「“者”」、つまり、その「人」を最初に見て、その「人」の「人としての“尊厳／人権、Human Dignity/Human Rights）”」を“支援”していく。“良くなる”ことに向けて支援するとともに、“悪くなる”ことに向けても、その人のままに、その人の「人としての尊厳」を大切に、専門家として“（相談）支援”するという「人権モデル」ともいえる。

“その人を、その人のままに”ということは、たとえば「“認知症”（患）者」「“障害”者」

「“要介護”者」、あるいは、その「人（者）」の前に「社会的、文化的、人種的、経済的な差異」を指示する“名目（カテゴリー）”を取り去ったあと、そこに立ち現れるのは、「人（A Person）」「人々（People）」、つまり「人間（human-being）」という「存在（Being）」であり、もう一度、自分の中にある「人」としての本質に立ち返ることを言う。つまり、“グローバル”とは、地理的広がりを言うだけでなく、その名目を取り去った地球上のすべての「人（間）」の一人に立ち返ることを言う。このように他者、自己をとらえようとする原理・基準を“グローバル・スタンダード”というのである。

２．「曲がった小道の実践」と「真っすぐの道の実践」

ここで、社会福祉とソーシャルワークにおいて、“A Person, First!”“People, First!”、“最初に、「人（A Person/Human-being）」を見よう！”“最初に、「人々（People）」を考えよう！”と言われるようになってきたことは前述した。「認知症患”者”」「障害“者”」「要介護“者”」という呼称において、その“人（者）”、その“人々（者）”を、先に見ていこう、という考え方が、ソーシャルワークの中で、どのように発展してきたか、そのことを振り返ることで、現在の「地域包括ケア」に対し示唆となるものを、『グローバルスタンダードにもとづくソーシャルワーク・プラクティス』（北島、２０１６年）の中で述べた例を示しておく。

ソーシャルワーク・プラクティスの方法と理論を振り返る時、リッチモンドは、１９１７年に『社会診断』を書いたとき、そのモデルは、医学における診断と治療といった“医学モデル”から、この題名をつけている。つまり、専門家として、まず専門家の専門的判断である“診断（diagnosis / assessment）”が最初にきて、つぎに、その「診断」にもとづいて、専門家によって“治療（treatment / therapy / implication）”がおこなわれる、いわゆる“構造化されている”「真っすぐな道の実践」である。現代では、ソーシャルワーク・プラクティスの進展にともない、多様な「理論」を発展させてきた。この“構造主義的”ではなく、“構成主義的”な一つ例をここで見ておこう。

ハウ（邦訳、２０１１年）は、ソーシャルワーク・プラクティス理論の進展を精査することで、この「批判的な熟考／省察の過程」を提唱している。そして、最後の方の章で「最善の実践（Best Practice）」の具体例として、「曲がった小道の実践（The crooked path of practice）」（邦訳、ｐ２４０－２４３）について述べている。サービス利用者との仕事をするときには、インテーベンションの小道がまっすぐなことはめったにない。それはねじれている。それはあっちへ行ったり、こっちへ来たりしている。したがって、結果は簡単に予測できない。実践の青写真はない。われわれにできる最善のことは、注意深さと好奇心と深い思いやりをもって旅行することである。そのときに、我々は不確実な旅行をしているサービス利用者を伴い、案内してより意味のある、ストレスのない未来へと導いていくのである。」（邦訳、ｐ２４０－２４１；原書、ｐ１９１）と述べている。その部分を参考にして、事例風に「８０歳前半のアメリアとソーシャルワーカーのイモゲンとのかかわり」として、事例

風に相互のかかわりの経過を書き出してみよう。

－８０歳前半のアメリアとソーシャルワーカーのイモゲンとのかかわり－

１．アメリアとボブの経緯

アメリアはアルツハイマー型の認知症と診断され、公営住宅にひとりで暮らしている。彼女は、従兄のボブからいくらかの支援をうけている。ボブは６０歳台で、アメリアとは特に親密なわけではない。ボブには、自分の家族と子どもがいる。アメリアは、もはやひとり暮らしはできない状態になっており、施設ケアがおそらく最も適切であるということが最初の申請書類であった。少なくとも、最初の段階では、ボブもこの計画を視点していた。

２．ソーシャルワーカーのイモゲンのかかわりの経過

（１） ソーシャルワーカーのイモゲンは、関わり始めたとき、時間をかけ、注意深く「彼女の生活史を聴く」ことによってアメリアを理解しようとした。

（２） すると、彼女の現在の家が安心感の源であり、安全な場所であることがすぐに明らかとなった。

（３） 物理的にだけでなく、心理的にもアメリアにとって家のもつ意味は「最善の実践」の出発点でなければならない。

（４） イモゲンがだんだん自分のことを理解してくれてきていることを感じ取って、アメリアは徐々にソーシャルワーカーと「信頼関係」をもつようになった。

① アメリアにとって家と近隣が重要なことを「受け止めて」、イモゲンは徐々にコミュニティ基盤の支援が受けられるように交渉できるようになった。

② そのことでアメリアは自分の家にとどまれるであろうし、彼女はそうしたいと強く思っていた。

③ コミュニティ基盤の支援の選択肢のなかには、デイケア、ホームケア、高齢者団体によるボランティアの支援があった。

④ 特に印象的なことは、イモゲンが「個人の物語」に実際に注意を払うことによって発展させた理解のレベルである。アメリアは、以前に保健専門職者が「押しつけようとした」「ケアの解決策」の試みには疑問をもったが、今回の「注意深く発展させてきた信頼関係」のなかで、「自分自身の物語」から明らかにしてきた支援の選択肢には疑いをもたなかった。

（５） イモゲンは、アメリアの認知症は進行しているので、事態は変化していくことを知っていた。しかし、彼女はアメリアのペースで進めていく準備もしていた。すなわち、彼女のニーズや状況の変化に対応して、絶えず協議、再協議ができるだけのアメリアとの関係を維持した。

（６） 幻覚をもちはじめる可能性のあるアメリアは、自宅ではますます不安を感じるようになってきているということが徐々に明らかになってきた。長い間、施設ケアに抵抗してきたのはアメリアであったし、最終的にはそこが最も安全な場所だというこ

とに合意したのもアメリアであった。

（７） アメリアに寄り添い、彼女のペースに合わせ、彼女の変化する能力に対する気持ちを大切にしながら、ワーカーは支援を受けない自立した状態から、支援を受けながら自立への移行を比較的にスムーズに、またきめ細かく進めた。

（８） そして最終的には施設ケアへと移行した。

この事例から見えてくるソーシャルワーク・プラクティス理論のエッセンスを、ハウ（邦訳、２０１１年）は、大きく２点にまとめている（邦訳、ｐ２４２)）。

① イモゲンは「内的なアメリアの物語に入り込んだ」。そして、その結果として、彼女の実践は調和し、きめ細かく、効果的になった。ケース全体を導く単一の理論、政策、法律などというものはない。むしろ、イモゲンは「アメリアが体験している世界をそのままに理解する」ことで、それぞれのときに、さまざまな考え、支援、そして資源を利用できた。

② イモゲンは発生するかもしれないリスクを思い悩やまないようにした。その代わり彼女は「アメリアの視点から世界を見る」ようにした。それゆえ、イモゲンは「保健や社会的ケアのマネージャーが表明したリスク」にではなく、「アメリアのニーズに即して対応した」。ソーシャルワーカーは、… 「アメリアの声を探し求め、それをアセスメントの中心に据えた」。… これは、アセスメントを１回限りの行事とする考え方には抵抗するソーシャルワーカーなのである。それは実践に対して、不確実性と矛盾を知って無力感に陥ってしまうのではなく、「批判的な分析」に基づいて「思いやりある行動をする」ことを要求する。

たとえば「現実（Reality)」「真理（Truth)」「知識（Knowledge)」「意味（Meaning)」「知ること（Knowing)」、そして「人（Person)」についての理解の仕方が、「オブジェクトビスト（客観主義)」「コンストラクティビスト（構成主義)」によって、大きく異なることがわかる。たとえば、ソーシャルワーク・プラクティス理論を考えるうえで、その「理論」、あるいは「知識」については、客観主義では、「知識(KNOWLEDGE)とは、人、世界、その他についての立証でき事実（verifiable facts）から成り立っているものである」とするが、構成主義では、「知識（KNWOLEDGE）とは、社会的、そして個人的な仮説の産物の一つとして構成され、そして、言語をとおして発展させられるものである」ということになる。この考えや思想の違いは、ソーシャルワーク・プラクティスの「理論」ばかりでなく、具体的なプラクティスにおける「技術」や「過程」に大きな影響をあたえることになる。また、多様なプラクティスを発展させていくことにもつながる。このことについて、議論をすすめてみよう。

３．社会構成主義のアプローチ

グリーン（Green）（１９９９年）は、『(第２版）人間行動理論とソーシャルワーク・プラクティス（*Human Behavior Theory and Social Work Practice*)』を出版している。ここでは、その中の「構成主義・アプローチ」をとりあげる。表（A）に「社会構成主義のアプローチを採用するソーシャルワーカーのためのガイドライン（一般的ガイドライン)」、表（B）に「社会構成主義のアプローチを採用するソーシャルワーカーのためのガイドライン（具体態的ガイドライン)」を示している。

表（A）：社会構成主義のアプローチを採用するソーシャルワーカーのためのガイドライン（一般的ガイドライン）Guidelines for Social Workers Using a Constructionist Approach）

一般的ガイドライン

1. ソーシャルワーカーは、それぞれのクライエントと、クライエントの人生における状況のユニークさを無条件に尊重する立場をとる。ソーシャルワーカーは、クライエントと自分たちは、自らが経験してきた歴史、肉体的特徴、毎日の生活で使う言語に埋め込まれた共有される意味などを反映した、各個人で異なる方法で場面に対応していくことを認識している。
2. ソーシャルワーカーは、クライエントが誰であるのか、問題は何か、クライエントにはどのような援助を提供するのか、といった面における自分自身がもっている先入観（個人的、理論的）を意識する努力を行い、それらをクライエントに押しつけないようにする。ソーシャルワーカーは、開かれた好奇心、関心ともいえる立場をとり、クライエントの人生に関するストーリーや問題を、クライエントが認識しているままに受け入れる。
3. ソーシャルワーカーは、治療のためのセッティングの構成と手順は、その仕事を行わせているコミュニティの価値観や信念を反映している点を認識する。
4. ソーシャルワーカーは、クライエントの個人的な現実を尊重し、クライエント自身の自我意識や、認識する世界の十全性を強化する手段として、その現実世界を維持することを尊重する。
5. ソーシャルワーカーは、問題解決のためには共同理解、価値の共存、そして他の意味生成を行わねばならないということを理解している。ソーシャルワーカーは、不公正な、もしくは偏見に基づいた対人的、もしくは制度的活動を支持しない。もしそのような事態が発生している場合には、その悪状況を軽減するためには、ソーシャルワーカーは他の価値観を探そうとする。
6. 治療には新しい情報が追加されるたびに変化していく、クライエント対ソーシャルワーカーの意味の交換が含まれる。意味は、このコミュニケーションンによって生まれる。対人関係の改善を行うには、他者の視点を取り入れる手助けをすることが重要である。
7. ソーシャルワークの介入プロセスは、クライエントとソーシャルワーカーがこれまでとは別の意味を共有、理解、使用するのに助けとなる状況を提供する。クライエントが定

義してきた問題は、こまでとは別の意味、ものの見方が生まれてくるにしたがって解決する場合がある。

表（B）社会構成主義のアプローチを採用するソーシャルワーカーのためのガイドライン（具体的ガイドライン）（Guidelines for Social Workers Using a Constructionist Approach）

クライエント対応の際に考慮すべき具体的ガイドライン

1. クライエントの現状からスタートし、その人から離れないこと。その人と、クライエントの課題から目を離さず、また共同で進めていく作業に関しては、クライエントの現状を尊重すること。
2. 「わからない」（not knowing）という立場を維持すること。これはパラドックスではあるが、私たち自身の言語を通じ、個人的な人生経験に基づいて生まれてきた選択的注意や解釈の仕方を常に自分で意識し、警戒する。また、相手をみる私たちのレンズに組み込まれた、人間行動学や病理学の理論やモデルにも警戒を怠らないことも重要である。
3. 思い込まないこと。相手がいっていること、いいたいことを理解していると思い込まない。
4. 確認する。常に、相手の説明、理解、意図を聞くようにする。
5. ナラティブやストーリーをつくる。私たちは皆、自分自身や他人に対して説明できるよう、自分自身や自分の住む世界の姿に関するストーリーやナラティブをつくり上げるプロセスの途上なのである。私たちの人生と、その世界に関するストーリー、もしくはナラティブの中で意味が生まれる。これには、クラインエトと対面しているソーシャルワーカーも含む。
6. クライントの心の中にある状況に対応する。内面の思考、感情、期待、動機づけに関して、今相手はどこにいるのか、という点は、時によって変わり、現在の外的状況を反映するものである。
7. クライエントの外的状況に対応する。これは、相手の人生の状況およびソーシャルワーカーが「環境」と呼ぶ、相手がこれまで生きてきた、そして現在生きている文脈を指し、それにはソーシャルワーカー自体、会社、社会方針と価値、経済要因までも含まれる。
8. 新しい意味をつくり上げる。人間は、常に意味を築き上げようとし、また生きるというプロセスにかかわりながら「意味をつくり出そう」（making meaning）とするものである。私たちが考え、信じ、感情を経験し、行動するのは、この築かれた意味、あるいは意味創出プロセスという基盤の上に立ったことなのである。
9. クライエントに共同作業をさせる。共同作業によって、相手は平等な立場で参加することができる。（両方にとって）意義あるパートナーシップによる共同作業は、相手の人生を、相手の立場から高めることに意を集中する。

Ⅱ．ソーシャルワーク・プラクティスの理論

次に、「ソーシャルワーク・プラクティス理論」の発展の歴史を簡単に振り返っておこう。

１．ソーシャル・ケースワークの理論

ソーシャル・ケースワークにおいては、１９７０年、ロバーツ（Roberts）とニー（Nee）（１９７０年）は、『ソーシャル・ケースワークの理論（*Theories of Social Casework*）』をまとめている。

『ソーシャル・ケースワークの理論』（ロバーツとニー編著、１９７０年）

ソーシャル・ケースワークの理論（一般的アプローチ）	執筆者
1.ケースワーク・プラクティスへの心理社会的アプローチ	フローレンス・ホリス
2.ケースワーク・プラクティスへの機能的アプローチ	ルース・Ｅ・スモーレイ
3.ソーシャル・ケースワークにおける問題解決モデル	ヘレン・Ｈ・パールマン
4.行動変容とケースワーク	エドウイン・Ｊ・トーマス
ソーシャル・ケースワークの理論（中間的アプローチ）	執筆者
5.家族療法の理論とプラクティス	フランシス・シェルツ
6.短期療法としての危機介入	リディア・ラポポート
7.社会化とソーシャル・ケースワーク	エリザベス・マックブルーム

１９２２年に出版されたリッチモンドの『ソーシャル・ケース・ワークとは何か？（What is Social Case Work?）』の中に使用された言葉である“Case Work”が、後に“Casework”という一つの言葉として、その専門知識・技術としてアイデンティティを確立していったことは、前述した「ソーシャルワーク・プラクティスの定義」の章で指摘した。その後、“ソーシャル・ケースワーク”として体系化され、教育・訓練を通し、専門技術の進展とともに、その専門知識と理論が積み重ねられ体系化されていった。それと並行するように、“ソーシャル・グループワーク”、“ソーシャル・コミュニティ・ワーク（コミュニティ・オーガニゼーション）”、“ソーシャル・アクション”、“ソーシャル・アドミニストレーション”、“ソーシャル・ケースワーク・（クリニカル）スーパービジョン”といった、それぞれの専門技術とともに、その専門知識・理論が体系化され、それぞれの専門性による専門職（団体）が設立され、そのアイデンティティが主張されていくようになった。その方法・過程（method/process）による分離、あるいは乖離がすすむとともに、他方では、児童、高齢者、障がい、一般医療、精神科医療等、その分野が“専門化”し、その“団体／協会／連盟”が設立され、その独自の“社会的アイデンティティ”（“法人”）を主張し、本来の”Social Work”であり、一つの“専門・サービス（Professional Service）”、“ソーシャルワーク・プラクティス（Social Work Practice）”であるという共通の基盤と原則が失われようとしたことがあ

る。その反省のもとに、全米ソーシャルワーク協会で委員会がもたれ、もう一度、“ソーシャルワーク・プラクティス”の専門価値、専門機能、専門知識、専門技術としての「共通基盤（common base）」が明らかにされ、その議論が『ソーシャルワーク・プラクティスの共通基盤（The Common Base of Social Work Practice）』（バートレット、１９７０年）としてまとめられ、出版される運びとなった。ここでの重要なポイントは、このタイトルおいて用いられている“Social Work Practice（ソーシャルワーク・プラクティス）”の“Common Base（共通基盤）”であるという言葉であるということである。“Social Work”一般についてではなく、その“Practice”ということばつけ加えられ、その共通基盤であるということが強調されているということである。

そして以下は、“ソーシャルワーク・プラクティス”における、その専門知識（Professional Knowledge）に焦点化する。この専門の“知（識）（knowledge）”の中でも、ソーシャルワーク・プラクティスの“理論（theory）”に絞って述べる。ときに、“モデル／アプローチ／パースペクティブ（model/approach/perspective）”等の“ことば”が用いられることもある。「技術（skill）」は“できるか、できないか”を問う。その選択を方向づけるかもしれないが、「知（識）」は、“できるか、できないか”を問わない。“知っているか、知っていないか（know）”を問う。あるいは、“語られるか、語られないか（ディスコース／ナラティヴ（discourse/narrative））”が問われる。また、“知識”が議論されるとき、“モダン”と“ポスト・モダン”という見方がある。ここでは、その“ソーシャルワーク・プラクティス”についての“知（識）”について議論する。

２．ソーシャルワーク・プラクティス理論の進展

リッチモンドが１９１７年に『社会診断（Social Diagnosis）』を書いたとき、“サイエンティフィク・チャリティ”が、その基盤にあったという主旨のことを述べている。ヨーロッパからの厖大な新移民を受け容れ、アメリカ合衆国が産業化、工業化、都市化へと拡大していった時代の中で、その本が書かれている。科学と、その技術の急速な進歩とともに、資本主義を基とする社会、経済は発展し、“モダン”な時代を迎えようとしていた。他方、ヨーロッパ諸国は、産業革命後の“資本家”と“労働者”の発生とその拡大は、新たな社会・経済問題をなげかけ始めていた。その後、福祉国家への傾倒と、他方では、マルクス思想とともに、社会主義国家の誕生があった。また、アメリカ合衆国を起源とする経済“大恐慌”が起き、多くに国が影響を受けた。その対応として“社会保障”が整備されるようになった。二つの大きな世界の戦争を経験した人々は、自然、人間、社会に対する考え方や思想において、それまでの“モダン”に対し、他方、“ポスト・モダン”といわれるあらたな風潮が起きてきたと言われるようになっている。建築、芸術、科学でさえ、その多様な様相がみられる。

政治・経済において、政府が干渉しない自由貿易に基づくアダム・スミスの自由経済から、資本主義の発展、その後の経済恐慌を世界が経験し、国と、その政府の対応として、財政投

融資、社会保障制度整備を行う大きな政府によるケインズ経済、他方、社会主義国家誕生をけん引したマルクス経済、そして、現在へと通ずる金融政策を中心とする小さな政府を標ぼうする新自由経済の勃興といった時代の変遷が見られる。政治・経済・社会の変化は、“ソーシャルワーク・プラクティスの理論”構築にも波及し、変化してきたと考えられる。その理論の発展を、次にみていこう。

（1） ３つの大きな思想と理論：“３つの理念型”

科学を中心としたモダンと、その後のポスト・モダンの出現、そして、その大きな潮流は、現代へと続いている。自然や社会に対する新たな考え方や思想が発展してきた。ソーシャルワーク・プラクティス理論を考える上でも、その影響を考えないわけにはいかない。そこで、まず、モダンとポスト・モダンへと通じる考え方や思想を整理しておこう。ソーシャルワークとの関連では、オクタイ（Oktay、２０１２年）は、その思想とその様相を、“３つの理念型（Ideal Type)”として、『グラウンディッド・セオリー：ソーシャルワーク・リサーチのためのポケット・ガイド』の中で要約している。一つは、科学思想を原理とする「ポジティビスト（Positivist)」、その近代・現代を席巻してきた“大きな思想や理論”に対する批判としての「コンストラクティビスト（Constructivist)」、あるいは、特にアメリカの中で発展した「プラグマティスト（Pragmatist)」の３つを、「オントロジー（Ontology)」「エピステモロジー（Epistemology)」「メソドロジー（Methodology)」の３つの側面に分けて、それぞれの特徴を説明している（表Ｃ）。

表（Ｃ）：“３つの理念型”（“Ideal Type”）

	オントロジー (Ontology)	エピステモロジー (Epistemology)	メソドロジー (Methodology)
ポジティビスト (Positivist)	リアリティは存在し、発見できる	理論は研究者によって発見される	データ分析の後に文献検索を行う
		グラウンデッド・セオリーによって、データから理論が現れてくる	分析から“コア・カテゴリー”が現れてくる
		研究者はフィールドに、なんにも書かれていない石板に向かうように入っていく	すべてのカテゴリーは、“コア・カテゴリー”と関連している
		研究者は客観性を維持し、先入観を最小限にする	分析を書きあげる時には、研究者（の作為）を消していく

コンストラクティビスト（Constructi-vist）	すべてのリアリティは構成される	研究者と応対者によって構成された視点が大切である	研究者と研究者の見方が研究の中心的な構成部分である
	複数のリアリティがある	研究者は研究と無関係ではありえない	研究者は構成を見えるものとするために再帰的（reflexivity）であろうとする
	相対主義（Relativist）		複数の見方が示される
			単一の“コア・カテゴリー”と一つの社過程からなる組み合わせは省かれる
プラグマティスト（Pragmatist）	外在的リアリティを受け入れる	客観的見方と主観的見方を合併する	ポジティビストとコンストラクティビストのグラウンデッド・セオリーモデルの両方を用いる
	研究目的のために最も有効なリアリティについての仮説を選択する	研究目的のために最も有効な研究者のスタンスを選択する	研究目的のために最も有効な方法を選択する

（Julianne S. Oktay (2012). *Grounded Theory*. Pocket Guides to Social Work Research Methods. Page 22）を参考に作成）

この３つの思想・理論は、ソーシャルワーク・プラクティス理論を考える上でも、重要なものである。サイエンティフィック・チャリティーを標ぼうして、メアリー・リッチモンドは１９１７年に、ソーシャル・ケースワーク理論の原点ともなった『社会診断』を出版した。この本は、医学的、科学的な考え方を手本とし、人びとの“社会的困難”を「診断」しようとしたものである。その後の「診断主義ケースワーク」の発展へとつながり、その後に、異なった思想と理論にもとづく「機能主義ケースワーク」の発展があり、ソーシャルワーク・プラクティス理論の歴史において、思想や理論をことにした二つの大きな潮流をつくりだすことになる。その後、ソーシャルワーク・プラクティス理論において、「コンストラクティビスト」の思想や考え方は、後述するように、現代のソーシャルワーク・プラクティス理論を考える上で重要なものである。

（２）オブジェクトビスト（客観主義）とコンストラクティビスト（構成主義）

フィッシャー（Fisher、１９９１年）は、『ソーシャルワーカーのためのコンストラクティビズムへの入門』の中で、「オブジェクトビスト（客観主義）」「コンストラクティビスト（構成主義）」の「現実（Reality）」「真理（Truth）」「知識（Knowledge）」「意味（Meaning）」「知ること（Knowing）」「科学（Science）」「因果関係（Causality）」「再帰性（Recursivity）」「人（Person）」についての理解の仕方の比較を示している（表Ｄ）。

表（D）オブジェクトビスト（客観主義）とコンストラクティビスト（構成主義）の認識論（Objectivist and Constructivist Epistemology）

現実（REALITY）

客観主義

１．現実(RELITY)とは、観察者（observer）から独立して“そとに（out there）”存在するものである。

構成主義

１．現実（REALITY）とは、体験（＝観察するものと観察されるあいだの関係性）として構成されるものである。

真理（TRUTH）

客観主義

２．真理について(ABOUT TRUTH)、*現実*（*reality*）はわれわれに入手できるものである。

構成主義

２．真理（TRUTH）とは、観察系の照合枠によって相対的なものである。

知識（KNOWLEDGE）

客観主義

３．知識(KNOWLEDGE)とは、人、世界、その他についての立証でき事実（verifiable facts）から成り立っているものである。

構成主義

３．知識（KNWOLEDGE）とは、社会的、そして個人的な仮説の産物の一つとして構成され、そして、言語をとおして発展させられるものである。

意味（MEANING）

客観主義

４．意味（MEANING）とは、シンボルとシンボルの構成によって外部に存在するものである。

構成主義

４．意味（MEANING）とは、解釈（interpretation）の過程として、内的、そして社会的、その両方において、構成されるものである。

知ること（KNOWING）

客観主義

５．知る過程（PROCESS OF KNOWING）とは、範疇化（categorization）と概念化（conceptualization）をとおしてのものである。

構成主義

５．知る過程（PROCESS OF KNOWING）とは、観察者の解釈的枠組み（the observer's interpretive framework）の中において、現在の出来事を解釈しているいままさに行われている一つの過程（an ongoing process）のことである。

科学（SCIENCE）

客観主義

６．科学（SIENCE）とは、真実（truth）と現実（reality）を発見するひとつの方法である。

構成主義

６．科学（SCIENCE）とは、観察者が、彼の効用（their utility）のために導き出される特徴に一致するか、検証（test）していく解釈的過程（an interpretive process）のひとつである。

因果関係（CAUSARITY）

客観主義

７．因果関係（CAUSALIY）とは線形的（一方向的）なもの（linear）である。もしＸが起きて、Ｙがつづいて起きたならば、その場合、ＸはＹの原因であると言えるかもしれないものである。

再帰性（RECURSIVITY）

構成主義

７．再帰性（RECURSIVITY）とは、ひとつのシステムの中のそれぞれぞれの要素が、そのシステムの中の自分以外の他の要素に双方向的に作用する条件をあたえ合うことである。

人（PERSON）

客観主義

８．人（PERSON）の行動とは、もしすべての変数の間のすべての関係が分っている場合のみ、十分に決定されたものとなる。

構成主義

８．人（PERSON）とは、行動は決定されたものではない。ひとびとは、自己と環境の間の相互（双方向）関係のなかで、主体性（エイジェンシー、agency）をもち、決定性（choice）をもっているものである。

（原書、ｐ１５を参考に作成）

この表を見ると、たとえば「現実（Reality）」「真理（Truth）」「知識（Knowledge）」

「意味（Meaning)」「知ること（Knowing)」、そして「人（Person)」についての理解の仕方が、「オブジェクトビスト（客観主義)」「コンストラクティビスト（構成主義)」によって、大きく異なることがわかる。たとえば、ソーシャルワーク・プラクティス理論を考えるうえで、その「理論」、あるいは「知識」については、客観主義では、「知識(KNOWLEDGE)とは、人、世界、その他についての立証でき事実（verifiable facts）から成り立っているものである」とするが、構成主義では、「知識（KNWOLEDGE）とは、社会的、そして個人的な仮説の産物の一つとして構成され、そして、言語をとおして発展させられるものである」ということになる。この考えや思想の違いは、ソーシャルワーク・プラクティスの「理論」ばかりでなく、具体的なプラクティスにおける「技術」や「過程」に大きな影響をあたえることになる。また、多様なプラクティスを発展させていくことにもつながる。このことについて、議論をすすめてみよう。

（３）従来的ソーシャルワークと革新的ソーシャルワークの理論

ムラリー(Mullaly、２００７年)は、『新構成ソーシャルワーク』の中で、従来(conventional)のソーシャルワーク理論と革新的（progressive）なソーシャルワークに分けて分類している(表Ｅ)。

表（E）従来的と将来的ソーシャルワーク・プラクティスの視点／アプローチ

（ムラリー、２００７年）（Mullaly, 2007）（原著：４８頁）

	従来的（Conventional）	革新的（Progressive）
個人変革	環境の中の個人 （個人変革、そして／ あるいは限定的社会変革）	根本的社会変革／変換
精神力動 行動変容 クライント中心 クライエント中心 臨床的 家族療法 ケースワーク 行動変容	一般システム理論 エコ・システム（生態学的） ライフ・モデル 問題解決 ストレングス視点	フェミニスト・ソーシャルワーク マルクス主義・ソーシャルワーク ラディカル・ソーシャルワーク 構造的ソーシャルワーク 反人種主義的ソーシャルワーク 反抑圧的ソーシャルワーク 批判的ポストモダン・ソーシャルワーク

（Bob Mullaly (Third Edition) (2007). *The New Structural Social Work.* を参考に作成）

特に、革新的なソーシャルワークについての日本語訳が一般に定着していないので、その原文を添付しておく（表Ｆ）。

表（F） Selective Conventional and Progressive Social Work Perspective/Approaches

	Conventional (consensus-based)	Progressive (conflict/change-based)
personal change	person-in-environment (personal change and/or limited social change)	fundamental social change/transformation
-psychodynamic -behavioral -client-centered -client-centered -clinical -family therapies -casework	-general systems theory -ecosystems (ecological) -life model -problem-solving -strengths perspective	-feminist social work -Marxist -radical -structural -anti-racist -anti-oppressive -critical postmodern -post-colonial -narrative therapy -just therapy

(p. 48)

従来のソーシャルワークにおけるシステム視点の限界を指摘し、その要約を表（G）としてまとめている。

表（G）システム視点（Systems Perspective）とエコロジカル視点（Ecological Perspective）の限界（ムラリー、２００７年）（Mullaly, 2007）（原著：４８頁）

1. They are not theories because they are descriptive only and have no explanatory or predictive capacities.
   So
   それらは理論（theory）ではない。なぜなら、それらは単に記述的（descriptive）であり、説明的（explanatory）でもないし、予測的（predictive）な力もない。
2. They are so vague and general they offer little specific guidance for practice.
   それらは非常に曖昧で一般的であるので、プラクティスのための特定のガイダンスとはならない。
3. They do not deal with or explain power relationships (i.e., power differentials).
   それらはパワー関係（power relationship）について取り扱っていないし、説明しない。
4. They do not accommodate or deal with conflict.
   それらは争い（conflict）を調整（accommodate）し、あるいは対処（deal with）しない。
   All social units (or subsystems) are viewed as interacting in harmony with each other and with the larger system (i.e., society).
   すべての社会的ユニット（social units）、（あるいは、サブ・システム）はお互いに、そして、その大きなシステムとも調和（in harmony）した相互関係（interacting）として捉えられている。
   The whole purpose of a systems approach is to eliminate any conflict that disrupts the system.
   システム・アプローチの全体的目的は、そのシステムを崩壊させる争い（conflict）を取り除く（eliminate）ためのものではない。
5. They operate to maintain the status quo since the goal is to restore the system to normal functioning.
   その目標は正常に機能する（normal functioning）ためのシステムを回復するためであるから、現状（status quo）を維持していくために働いているのである。
6. Social problems are believed to be a result of a breakdown between individuals and the subsystems (e.g., family, school, peer group, welfare office) with which they interact.
   社会問題は、個々人（individuals）とサブ・システム（たとえば、家族、学校、ピア・

グループ、福祉機関）との間の破たん（breakdown）の結果であると信じられている。

7. The focus on the here-and-now situation and possibilities for intervention contributes to a neglect of history.
   今ーここで（here-and-now）の状況とインターベンションの可能性に焦点化することは、その歴史を無視することになる。
8. There is no recognition or analysis of oppressive social structures that produce inequality.
   不平等を生み出している抑圧的社会構造の認識と分析がない。

（原書、ｐ４９）

また、革新的ソーシャルワークとしての新構造的ソーシャルワークの特徴をまとめ、表(H)として提示している。

表（H）新構造的ソーシャルワーク（New Structural Social Work）の主な要素
（ムラリー、２００７年）（Mullaly, 2007）（原著：２４９頁）

1. Social problems are built into the structures (social institutions, social process, social practices, and social relationships) of society.
   社会問題は社会の構造（structures of society）（社会制度（social institution）、社会過程（social process）、社会実践（social practice）、社会関係（social relationship）に組み込まれている（built into）。
2. Focusing on the individual as the cause of social problem is blaming the victim.
   社会問題の原因として、その個人（the individual）に焦点化することは、犠牲者（victim）を非難していることである。
   For social problems to be resolved, social structure must be change.
   解決すべき社会問題のために、社会構造が変化されなければならない。
3. Social inequalities are mainly structural in nature and not the result of innate differences.
   社会的不平等は、本質的に、主に構造的なもの（structural in nature）であり、生まれ持っての違い（innate differences）の結果ではない。
4. Society functions in ways that discriminate against people along lines of class, gender, race, and so on.
   人びとに対する差別（discrimination）は、階級（class）、性別（gender）、人種（race）、その他の線に従って、社会が機能する（function）。
5. The state's institutions, such as the law and educational system, function as instruments of oppression and benefit the privileged groups.
   国の制度（the state's institutions）（たとえば、法律（law）、教育システム（educational

system））は、抑圧の手段（instrument of oppression）として、そして特権的グループに利益をもたらすよう機能する。

6. The traditional dichotomy between the individual and society needs to be challenged; individual problems cannot be understood separate from the social context.
   個人と社会の間の伝統的二律背反（dichotomy）は、異を唱える必要がある。つまり、個人の問題は、社会的状況（social context）と切り離して理解されることができない。
7. Social structures, ideology, and personal consciousness are interrelated – each element are component of society impacts on the others.
   社会構造、イデオロギー、個人的意識（personal consciousness）は相互に関係している。つまり、それぞれが、他の要素に影響をする構成要素（component）である。
8. Knowledge is not objective, and the knowledge of the dominant group forms the ideas in society and reflects the interests of the dominant group, often at the expense of subordinate groups.
   知識（knowledge）は客観的（objective）ではないし、支配グループ（dominant group）の知識は社会において支配的考えを形成し、多くの場合、従属グループ（subordinate groups）の犠牲の上に、支配グループの利益をもたらす。
9. A social change perspective must be adopted as a response to social problems and oppression.
   社会変革的視点（social change perspective）は、社会問題と抑圧への対応として、採用されなければならない。
10. Conventional social work perpetuates social problems by focusing on personal change and/or limited social reform rather than fundamental social change.
    慣例的ソーシャルワーク（conventional social work）は、根本的社会変革（fundamental social change）よりも、個人変容（personal change）、そして／または限定的社会改革（limited social reform）によって、社会問題を永続させる。
11. Capitalism should be rejected in favor of some kind of reconstituted democratic socialism.
    ある種の再構成された民主社会主義（democratic socialism）に賛成して、資本主義（Capitalism）は拒否すべきである。
12. No single source or form of oppression can be claim primacy.
    ただひとつの抑圧の原因や形態が源になると主張することはできない。
    All sources and forms of oppression are to be rejected, and no hierarchy of oppression is developed.
    すべての原因や形態が拒否されるべきであり、抑圧のどのような階層も発展させてはならない。
13. The welfare state in a capitalist society props up capitalism and operates in way to

reproduce all oppressive social relations.
資本主義社会における福祉国家は資本主義を支え、すべての抑圧的社会関係を再生産する手段として作用する。

14. The positive and liberating aspects of modernist critical social theory and of critical postmodern theory are both of central importance.
モダニスト・クリティカル社会理論（modernist critical）とクリティカル・ポストモダン理論（critical postmodern）の積極的そして解放的側面の、その両方が中心となる重要なものである。

15. Emphasizing either 'individual agency' or 'structural forces' as the focus for social change is overly reductionist.
社会変革の焦点として、「個々のエイジェンシー（individual agency）」、あるいは「組織的な勢力（structural forces）」の、どちらか一方を強調することは、過度な単純化である。
To understand social problems and develop structural approaches, both are necessary.
社会問題を理解し、構造的アプローチを発展させるために、両方が必要である。

16. The dominant order must be challenged and resisted by developing counter-discourses to victim-blaming, free-market glorification, welfare dependency, etc.
ドミナントな秩序（dominant order）は対決しなければならないし、犠牲者非難（victim-blaming）、自由市場礼賛（free-market glorification）、福祉依存（welfare dependency）、その他に対しても、カウンター・ディスコースを発展させていくことによって、抵抗しければならない。

17. An anti-oppressive approach to social work should be adopted (see next chapter).
ソーシャルワークへ反抑圧アプローチ（anti-oppressive）が適用されるべきである（次の章を参照）。

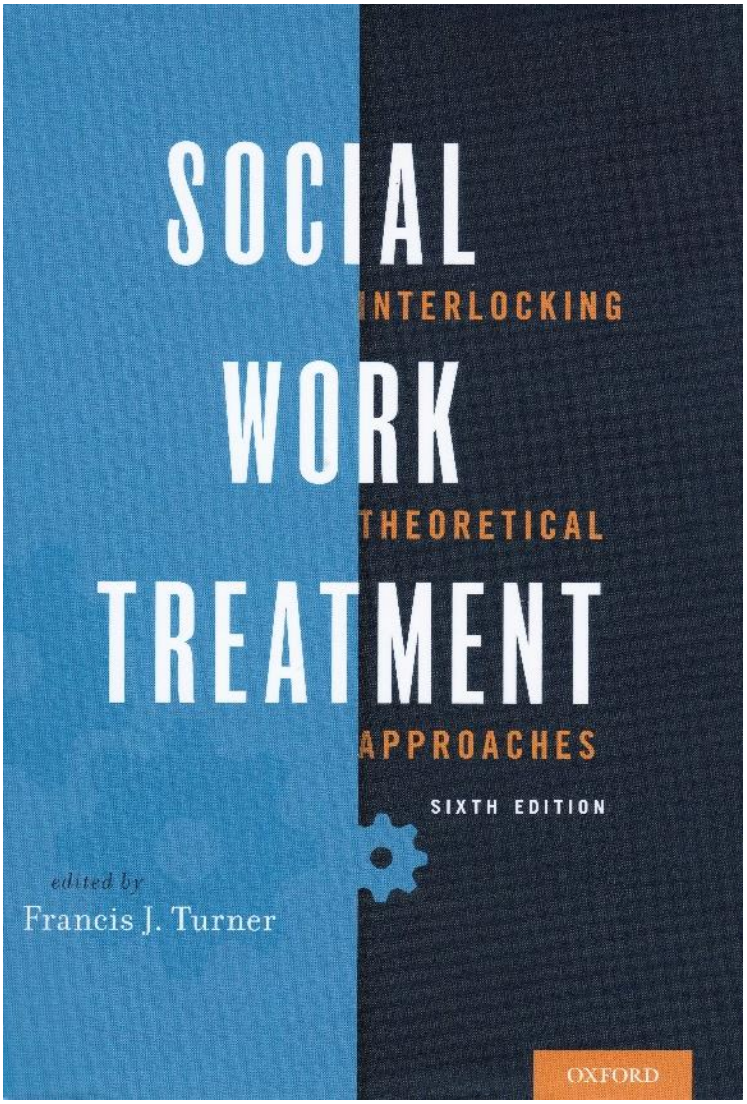
（邦訳、１７０～１７１頁、原文、１３４～１３５頁）

文献

David D. V. Fisher (1991). *An Introduction to Constructivism for Social Workers*. Praeger.
Bob Mullaly (Third Edition) (2007). *The New Structural Social Work.* Oxford University Press.
Bob Mullaly (Third Edition) (2007). *The New Structural Social Work.* Oxford University Press.
Julianne S. Oktay (2012). *Grounded Theory*. Pocket Guides to Social Work Research Methods. Oxford University Press.

Ⅲ．ターナー（２０１７年）：ソーシャルワークの３８理論的アプローチ

フランシス・Ｊ・ターナー（Francis J. Turner）は『ソーシャルワーク・トリートメント（*Social Work Treatment*）』として各種の理論的アプローチ（theoretical approach）をまとめ、時代ごとに編集を重ね、第１版を１９７４年、第２版、１９７９年、第３版、１９８６年、第４版、１９９６年、そして、２０１１年に第５版を出版してきました。もっとも最近の２０１７年の第６版では、３８の理論的アプローチを示しています。



1. Attachment Theory and Social Work Treatment 1
Timothy Page

2. Chaos Theory and Social Work Treatment 23
Sandra Loucks Campbell

3. Client-Centered Theory and the Person-Centered Approach: Values-Based, Evidence-Supported 34
William S. Rowe

4. Cognitive Behavior Theory and Social Work Treatment 54
Ray J. Thomlison and Barbara Thomlison

5. Cognitive Theory and Social Work Treatment 80
Pranab Chatterjee and Suzanne Brown

6. Constructivism: A Conceptual Framework for Social Work Treatment 96
Donald E. Carpenter and Keith Brownlee

7. Social Work Theory and Practice for Crisis, Disaster, and Trauma 117
Diane M. Mirabito

8. Ecopsychology: Adding "Eco" to the Biopsychosocialspiritual Perspective 131
David S. Derezotes

9. Empowerment Approach to Social Work Treatment 142
Judith A. B. Lee and Rhonda E. Hudson

10. Existential Social Work 166
Donald Krill

11. Feminist Theory and Social Work Practice 191
Eveline Milliken

12. The Four Forces: An Inclusive Model 209
Au-Deane Shepherd Cowley

13. Functional Theory and Social Work Practice 223
Katherine M. Dunlap

14. General Systems Theory 240
Nancy Riedel Bowers and Anna Bowers

15. Gestalt Theory and Social Work Treatment 248
Elaine P. Congress

16. Hope Theory and Social Work Treatment 266
Alexander T. Polgar

17. Hypnosis and Clinical Social Work Practice 276
Elayne Tanner

18. Life Model of Social Work Practice 287
Alex Gitterman

19. Meditation and Social Work Practice 302
Thomas Keefe

20. Mindfulness and Social Work 325
Kirstin Bindseil and Kate Kitchen

21. Narrative Theory and Social Work Treatment 338
Patricia Kelley and Mark Smith

22. Neurolinguistic Programming Theory and Social Work Treatment 351
G. Brent Angell

23. Oppression Theory and Social Work Treatment 376
Susan P. Robbins

24. Problem-Solving and Social Work 387
Micheal L. Shier

25. The Psychoanalytic System of Ideas 398
Elizabeth Ann Danto

26. The Psychosocial Framework of Social Work Practice 411
Emilia E. Martinez-Brawley and Paz M.-B. Zorita

27. Relational Social Work: A Contemporary Psychosocial Perspective on Practice 420
Carol Tosone and Caroline Rosenthal Gelman

28. Relational Theory and Social Work Treatment 428
Dennis Miehls

29. Resilience Theory and Social Work Practice 441
Robbie Gilligan

30. Role Theory and Concepts Applied to Personal and Social Change in Social Work Treatment 452
Dennis Kimberley and Louise Osmond

31. Social Learning Theory and Social Work Treatment 471
Bruce A. Thyer

32. Social Networks and Social Work Practice 481
Elizabeth M. Tracy and Suzanne Brown

33. Social Work Practice in the Time of Neuroscience 497
Robert J. MacFadden

34. Socially Constructing Social Work 504
Dan Wulff

35. Solution-Focused Theory 513
Mo Yee Lee

36. Task-Centered Social Work 532
Anne E. Fortune and William J. Reid

37. Trauma-Informed Social Work Treatment and Complex Trauma 553
Dennis Kimberley and Ruth Parsons

38. Emerging Theories: Electronic Exchanges 574
Emilia E. Martinez-Brawley

Epilogue: *Social Work Treatment*, Sixth Edition: Some Final Comments 586

以上３８理論的アプローチの中から、５つの理論を取り出し、その抜粋を以下に示した。

① 機能的理論とソーシャルワーク（キャサリン・M・ダンラプ（Katherine M. Dunlap））
（原著：２２５１－２４１ページ）

二つの派の出現

心理学の分野において、１９２０年代の偉大な二つ柱は、精神分析（psychoanalysis）と行動主義（behaviorism）であった。ソーシャルワークの分野において主な焦点はまた、個人の内面の問題であった。そして、行動主義、社会問題、あるいは社会変革に対しては比較的無関心であった。その代り、精神分析的理論を取り入れ、専門家は、医学モデル（medical model）へ深く関わるようになった。診断派（diagnostic school）と機能派（functional school）と呼ばれた、その二つの派が精神分析的方法を支持し、応用していくとともに、専門職主義（professionalism）のペースを加速させていった。（原著：２２８－２２９ページ）

大きな分裂（原著：２２９－２３０ページ）

考え方の異なる二つの派を統合しようとして、アプテカー（Aptekar）（１９５５年）は、それぞれの基本的な主張の比較を提示した（表（Ｉ）と表（Ｊ））。

表（Ｉ）診断派（フロイドの考え）

１．行動を決定する要因（a determinant）としての無意識のこころ（unconscious mind）
２．感情（feeling）と態度（attitude）におけるアンビバレンス（ambivalence）
３．現在の行動を決定する要因としての過去の体験（past experience）
４．治療には必須な感情転移（transference）
５．すべての援助（helping）において対処される要因となるこころの抵抗（resistance）

（原著：３５ページ）

ケースワーク機能派によって導入され、上の表と対置させたランク派の考えの主な概念は、表(Ｊ)である。

表（Ｊ）機能派（ランクの考え）

１．パーソナリティのなかの組織化する力（an organizing force）としての意志（the will）
２．自分を明確にするための（to differentiate himself）個人的ニードのひとつの表現としての対抗－意志（the counter-will）
３．治療的成長のひとつの源としての現在の体験（present experience）
４．分離（separation）の重要性
５．人間がもつ固有の創造性（inherent creativity）

（原著：３５ページ）

機能的ソーシャルワークによるトリートメント（原著：２３３－２３４ページ）
・・・スモーレイ（１９６７年）は、５つのジェネリック原則における機能派の成熟した主義をとらえ、その概略を示している。

１．*ダアイアグノシス*（*Diagnosis*）は、エイジェンシー・サービス（agency service）の利用と関連させるべきである。
２．ソーシャルワーク過程－開始、中間、終結－といった制限された*時間*（*Time*）は、クライエントの時間の使用に、利用されなければならい。
３．*機関の機能*（*Agency function*）が、ソーシャルワーク・プロセスに焦点、内容、方向を与え、社会による責任を付与し、そして、部分化（partialization）、具体化（concreteness）、区別化（differentiation）により性格づけていく過程においてクライエントとかかわる。
４．*構造の意識的使用(Conscious use of structure)* は、サービスの定義と範囲を定める申請書類、機関の方針、そして物理的立地といった無数の要件を用いることによって、ソーシャルワーク・プロセスの効果をより促進する。
５．すべての効果的ソーシャルワーク・プロセスは、関係（relationship）の中で行われる。その*関係*（the *relationship*）の目的は、クライエントが都合のよい選択（propitious choices）をするよう援助することである。

（原著：２３３ページ）

② **クライエント－中心理論（Client-Centered Theory）／パーソン－中心アプローチ（A Person-Centered Approach）の永久的原理**（ウイリアム・ロウ（William Rowe））（原著：５８～７６ページ）

トリートメント（Treatment）(原著：６５～６７ページ)

クライエントー中心療法（client-centered therapy）の基本目標は、一人の潜在的な能力のある個人の自己ー実現（self-actualization）のために、すでにある力（an already existing capacity）を解放する（release）ことである。

１．人（the individual）は、存在している状況のもとで、自分自身を導き（guide）、調整し（regulate）、方向づけ（direct）、コントロールする力（the capacity）をもっている。
２．人は、苦悩や不安をともなう人生において、それがなにかを理解する潜在的力（the potential）をもっている。
３．人は、苦悩や不安を取り除くだけでなく、自己実現（self-fulfillment）や幸福を経験する方法を自らが改善する（reorganize）潜在的力をもっている。

１９５７年、ロジャースは、治療において良い結果（a positive outcome）をもたらす必要で十分なことであると彼が信じることは、以下の要素を前提するとした。

---

1. The therapist is genuine and congruent in the relationship.
   治療者は、関係において純粋で一致している。
2. The therapist experiences unconditional positive regard toward the client.
   治療者は、クライエントにたいし、無条件の肯定的配慮を経験している。
3. The therapist experiences empathic understanding of the client's internal frame of reference.
   治療者は、クライエントの内的枠組みについて共感的理解を経験している。
4. The client perceives these conditions at least to a minimal degree.
   治療者は、少なくともこのような状況を最低は気づいている。

（原著：６５ページ）

ケース例（原著：６６ページ）

ブライアンは、自己評価（self-esteem）が低く、不安な感情で数年間、繰り返し悩んできたクライエントである。ブライアンによると、最近、これらのことが激しくなり、それがなぜだかわからないとのことである。

面接例（原著：６８ページ）

Brian: "Today has been an awful day. I have always felt like less of a person compared to everyone else, but recently it seems as though things have gotten worse and I don't know why."

ブライアン：「今日はひどい日だ。他の人と比較して、劣っているようにいつも感じてきたけど、最近、もっとわるくなっているように思うし、それがなぜだかわらない。」
Therapist: “I understand that you feel bad. This is a very difficult time for you and I wonder if it feels a little scary to be unsure of what is wrong.”
セラピスト：「あなたは、気分が良くないと感じていらっしゃるのですね。これはあなたにとって、非常にいやなときで、なにがまちがっているか、確信がほとんど持てないと感じていらっしゃるのでしょうね。」

Brian: “It is scary, because I don’t like to feel as if I’m not in control of myself. Also, sometimes I feel like there is no one around me who understands how I fell, or they just think my feelings are wrong. I mean my family gets mad that I don’t talk to them enough, but how can I open up to them when they won’t understand me?”
ブライアン：「こわいよ、なぜって、自分がまるでわからなくなってしまうという感じがイヤなんだ。それと、ときどき、わたしがどんなことを感じているのか、わかってくれる人がまわりにいないと思うことがあるし、あるいは、わたしの感じていることがただまちがっているだけと思ったりする。わたしが家族と十分に話さないということで、家族が怒っているという意味なんだけと、家族がわたしをわかってくれないのに、どのように初めていいのか。」
Therapist: “Currently, thigs seem so overwhelming to you and you feel that you have no one in your personal life who understands what you’re going through, so you can’t see the point of sharing your feelings with them.”
セラピスト：「最近、どうしようもなくなくなっているように思えるし、そして、ここから抜け出すために何をするかを理解してくれるひとが、あなたのまわりにいないという感じがして、だれかとあなたの気持ちをわかちあう頃合いをみいだすことができないんですね。」

Brian: “Yes, they just don’t get it. Maybe I’m just not worth the trouble of listening to.”
ブライアン：「そうです。わかってくれないんです。おそらく、わたしは、問題を聞いてくれるだけの価値がないんでしょう。」
Therapist: “Well, I believe that you are worth listening to. I am glad to see you when you come for sessions and share your thoughts and feelings. I also believe that you are able to make your own decisions about who you want to speak to and when.”
セラピスト：「さて、あなたは聞くだけの価値があると、わたしは信じていますよ。あなたが面接にきてくれて、あなたの考えと気持ちを分かり合えたこと、それに、あなたにお会いできたことを感謝しています。あなたが、だれに、そしていつ話をしたらよいか、自分で決めていくことができるということも、わたしは信じています。」

解説：クライエントー中心療法アプローチを用いて、セラピストによって指示（direction）、

判断（judgment)、解釈（interpretation）をすることなく、ブライアンが何について、いつ話すかをブライアンが決めていく力を与えた。セラピストの無条件の肯定的配慮（unconditional positive regard)、共感（empathy)、そして一致（congruence）は、より気楽に、心配することなくブライアン自身が表現していけるようにしている。これが、自己ー探索（self-exploration）と人間的成長（personal growth）の多くの機会を彼に与えた。セラピストのブライアンへの信頼（confidence）は、彼が失いかけようとし、人間関係をより開こうと感じていた彼の生活にコントロールを取りもどさせ、エンパワメントを与えた。

③ **一般システム理論（General Systems Theory (GST)）：ソーシャルワーク理論とプラクティスへの寄与**（ダン・アンドレア（Dan Andreae)）（原著：２４２－２５４ページ)

定義（原著：２４３ページ)

ソーシャルワーカーによって用いられるすべての理論的パラダイムの中、ＧＳＴはおそらく最も明確に現実を表現する。システム理論は、全体（a whole）を構成する要素（the elements）の間の相互関係（reciprocal relationship）を強調する概念を含んでいる。これらの概念はまた、個人、集団、組織、あるいは地域の間の関係、そして、環境の中の相互に影響しあう要素に焦点化する（ＮＡＳＷ、２００３年、４２８ページ)。(原著：２４３ページ)

システム理論の家族への応用（原著：２４６－２４７ページ)

システム理論は、ソーシャルワーク・トリートメントとして、特に、ゴールーオリエンテッド・プラニング・プロセス（a goal-oriented planning process）として用いられてきた。ピンカスとミナハン（？）（１９７３年）は、システム・モデルと組織化フレームワーク（an organizing framework）を開発した。家族単位（the family unit）による形態にかかわらず、家族は、社会化、安全、ある社会資源、ケア、そして保護を提供するといったことを含んだ､家族メンバーのために､ある程度の手段的(instrumental)であり表出的(expressive)な機能をあたえる。ほとんどの場合、家族は出産（procreation）の源とし寄与する。家族システムは、以下に示す前提となる、大きなコミュニティの下位システム（a subsystem）を意味する。

１．全体は、部分の合計より大きい。

２．システムの一つの部分を変化させると、そのシステムの他の部分に変化をもたらす。

３．家族は、時間とともに組織化され、発展していく。生きている間、家族はいつも変化し、家族メンバーは異なった役割を担っていく。

４．家族は、情報を受け、家族内お互いに、そして家族外の人々との情報を交換する一般的

にオープン・システムである。

５．一人の機能不全（individual dysfunction）は、アクティブな感情システム（an active emotional system）を多くの場合反映している。

要約（原著：２５３ページ）

現代の２１世紀のカナダとアメリカ社会における個人、集団、家族、組織、そして地域の複雑な機能に関する特徴や広い視野を、ＧＴＳはソーシャルワーク理論や実践に与えてきた。このパラダイムは、埋め込まれたネーットワーク構成要素の間のダイナミックな網の目や相互関連を理解するために貢献している。

④ コンストラクティビズム（Cosntructivism）：ソーシャルワーク・トリートメントのための概念的枠組み（ドナルド・Ｅ・カーペンター（Donald E. Carpenter））（原著：１１７－１３３ページ）

アセスメント、ダイアグノシス、そしてトリートメントにとっての意義（原著：１２４－１２６ページ）

---

1. Implications for Assessment
   アセスメントにとっての意義
2. Implications for Diagnosis
   ダイアグノシスにとっての意義
3. Treatment Implications
   トリートメントにとっての意義

従来の方法とコンストラクティビズムの方法との比較（原著：１２４～１２６ページから作成）

アセスメントにとっての意義（Implications for Assessment）（原著：１２４ページ）

ケース・アセスメント・プロセスは、人間行動－その因果関係－の理解に関する問題の結びつきにかかわる。実証主義的因果関係による説明（Positivist causal explanation）は、個人と行動全体の両方のほとんどのことが、“外部（external）”の特定の影響の直接の結果（the direct result）であるということを前提とする。

臨床的な場面では、コンストラクティビストの基本的アプローチにおいては、基本的な前提とされることは、議論されている問題に関連するクライエントが言及する枠組み（the client’s frame of reference）（構成（construction））である。これは、学んでいるのはプラクティショナーであり、教えているのはクライエントであると感じられている

クライエントと、プラクティショナーによる密接な協同（collaboration）としてのひとつのプロセスである。

1. ダイアグノシスにとっての意義（Implications for Diagnosis）（原著：１２４－１２５ページ）

たとえば、精神障害の診断と統計マニュアル（*Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorder*）によって代表されるアプローチにおいては、ケースのダイアグノシスの課題は、分類体系を用いるプラクティショナーとその技術によって、特定のクライエントの“症状”に適応させることである。クライエントの役割は、プラクティショナーの専門技術を受動的に受けることである。

問題の性質についての考え方を発展させていくコンストラクティビスト・ベイスド・アプローチ（constructivist-based approach）は、日常的意味合い（its usual meaning）によって再定義されていくプラクティショナーの専門的役割とともに、プラクティショナーークライエントの協同（collaboration）と相互関係性（mutuality）を必要とすることを強調する。プラクティショナーの専門技術は、クライエントについては何も知らない（know nothing about the clients）という前提とともに、それぞれのケースにアプローチすることによって、クライエントとともに学ぶというスタンス（a learning stance with the client）を前提とする。

2. トリートメントにとっての意義（Treatment Implication）（原著：１２５－１２６）

より伝統的なプラクティス・アプローチにおいては、特に心理力動的アプローチ（psychodynamic）がそうであり、ケースの“本当の問題（real problem）”を明らかにする（uncover）ことが、プラクティショナーの必須の仕事であるとみられてきた。この“本当の問題（real problem）”という概念は、クライエントのある客観的な病理的／力動的（an objective pathological/dynamic condition）なクライエントの状況があり、そして／あるいは、丁度、医師が悪性細胞を発見し、がんと診断するように、患者の苦痛や症状のそこにある“本当の（real）”問題を、プラクティショナーの臨床技術をとおして発見することができる状況にあるということを意味する。

コンストラクティビスト・ベイスド・アプローチとトリートメントにおいては、クライエントによって分っていない客観的結果によって隠されている問題があり、プラクティショナーがクライエントを援助することで発見できるという意味での“本当の（real）”問題というのはないということが前提となる。

ケース例（原著：１２６－１２７ページ）

[ビネット]

父親が家族にひどい暴力をふるったということで、こどもはその家族から切り離され、母親はシェルターに入るということになって、その家族は治療にやってきた。その母親は、髪を

振り乱し、スリッパを履いていて、数本の歯を失っているという状態でやってきた。その父親は、大きな男で、はだしで、おそらく３００ポンドはあるであろう、デニムを着て、下着は着ていないが前掛けで覆った姿であり、部屋に入ってくるや怒鳴り始めた。父親は、貧乏であり、能無しの白人で、何者でもありえなかったし、他人から何をするかを教えられることもなかったが、彼は家族を彼のやり方でやってきたが、“町のバカども”によってつれてこられたという理由だけで、ここにいるのである。彼はまた、妙なことであるが、“黒人はきらいだ”と叫んでいた。

その時のことを、アンダーソンは書いている。「鏡の後ろにいたすべての者は、本能的に椅子を後ろに引いた。」そのクリニックのコンサルタントであるハリエット・ロバーツだけが、ほんとうに誠心誠意でもって、彼女は彼が何を言っているのか、なぜ黒人を嫌いなのかを教えてほしいと言った。ロバーツは、夫の母親や、そして妻が滞在していたシエルターのスタッフに来てもらい、児童保護機関とのコンサルテーションを行いながら、夫と妻を別々に、そして一緒に会いながら、治療をつづけた。（過去、いつもそうであったように、妻は夫と一緒に住むようになった。）漸次、彼がより治療において人間的になっていくにつれて、外での彼の行動は改善していった。最初の面接後、彼は妻をたたくことをやめたし、こどもが家にもどってきた時も、こどもにたいしても、二度とたたくようなことはなくなった。

解説：ここで適応されているプラクティス原理は、コンストラクティビスト認識論（constructivist epistemology）からのものでーその当時は、セラビストにたいし潜在的な危険があり、家族には危険であったことが分っているークライエントとともに学ぶ者の役割（the role of learner with the client）をセラピストの前提とするという事実にある。

⑤ **ポストモダン・ソーシャルワーク（ダン・ウルフ（Dan Wulff））**（原著：３５４－３６３ページ）

モダニズムとポストモダニズム（原著：３５５－３５６）

ポストモダニズムとソーシャル・コンストラクティビズム（原著：３５５－３５６ページ）

特に、ポストモダニストは、“われわれが生きている事実（the realities we live in）とは、われわれがかかわっている（engaged in）会話からでてくること（outcomes of the conversation）である”というオープンな認識と価値観をとる立場から活動することを好む（ガーゲン、２００９年、４ページ）(Gergen, 2009, p.4)。

この引用は、わたしの仕事の中心をなし、つまり、事実（realities）は複数（plural）であり（単数（singular）ではない）、言語（language）は重要であり、関係（relationships）はわれわれが生きている中心であり、そして、人生とその理解は流動的（fluid）である、といういくつかの鍵となる考えを表現している。世界（the world）についてのわれわれの理

解は、本当らしさ（verisimilitude）をもっているーそれらは、それ自身、真理（Truth）と呼ばれるある普遍性（universal）をとらえているというより、真理の姿（the appearance of truth）をしている。そのような不完全な理解（imperfect understandings）は、われわれの生（our live）をナビゲートする地図である。（原著：３５６ページ）

ポストモダン・ソーシャルワークの生成的可能性（原著：３５６－３５８）

以下のポストモダン・ソーシャルワークのスタンス、あるいはアプローチは、ソーシャルワーカーが利用する幾つかの特別の機会となりえる特筆すべきもの。

ポストモダン・ソーシャルワークのアプローチ

・二者択一の正当性（Legitimacy of Alternatives）

ポストモダン・ソーシャルワーク・パースペクティブでは、二者択一の見方（特に、クライエントをかかえているとき）は、ソーシャルワーカーが、そのような視点のある価値をもつか、もないかにかかわらず、正当な見方であると考えられている。このことは、すべての視点が規定され、あるあたえられた状況において同じ価値観や力をもつということ示唆しているわけではない。しかしながら、このことは、すべての視点が、*視点*（*viewpoints*）として正当であり、そのような視点を持つ人々は正当な視点の保持者として特典をあたえられることになる。最初で、最大のよいことは、そのクライエントがソーシャルワーク・インターベンションにおいて、一人の正当な参加者であり、関連する会話のパートナーとして尊敬されるということである。（原著：３５６ページ）

・普遍性の欠如（Absence of Universals）

ソーシャルワークにおけるポストモダンへの批判の一つは、より良い社会のビジョンをつくりあげること、あるいは、社会正義や人権の普遍的理解ができなくなるということである。そのような理解は、ソーシャルワークにとって基本的なことであるので、ソーシャルワークに二者択一を可能にするという重要な意義はある一方、他方、ポストモダニズムはプラクティスの基本を形づくるに十分のものではない。

・押しつけない（Non-impositional）

ポストモダン・ソーシャルワーカーは、クライエントに対して、行動することを命令したり、故意に考えを押しつけたりすることをしない。このことは、権限の行使や裁判所命令に関するソーシャルワーク機能の遵守については、非常にむつかしいことに直面することになり、調和させることは不可能に思える。（原著：３５７ページ）

・個人とコミュニティがユニークである特典（Privileging the Uniquenesses of Individuals and Communities）

ポストマダンのスタンスから、ソーシャルワーカーは、一般性（the generalities）より、もっているユニークネス（the uniquenesses）の方を好む。このことは、多くの場合、効率性というラベルのもとに、広く実行することができる大きなスケールの理解をつくり

だすことを強調することとは、対抗することになる。ポストモダンのスタンスは、人々をいつも動いていて、変化しているものと見ることをゆるすことになる。このことは、クライエントは動いていて、変化し、自らが発見するもの（人々が変化していくよう望んでいるときの重要な要素）としてアプローチするソーシャルワーカーにとって、その立場をあたえる。

[付録１]　新たなソーシャルワーク・プラクティス理論とその文献

ストレングス・ソーシャルワーク（Strength Social Work）

・Brenda DuBois and Karla Krogsrud Miley (Fourth Edition) (2002). *Social Work: An Empowering Profession*. Allyn and Bacon.
・Brenda DuBois and Karla Krogsrud Miley (Fifth Edition) (2005). *Social Work: An Empowering Profession.* Person Education Inc.
・Brenda DuBois and Karla Krogsrud Miley (Sixth Edition) (2010). *Social Work: An Empowering Profession.* Person Education Inc.
・Brenda DuBois and Karla Krogsrud Miley (Seventh Edition) (2011). *Social Work: An empowering Profession.* Person Education Inc.
・Siobhan Maclean and Rob Harrison (2011). *The Social Work Pocket to … Power and Empowerment.* Kirwin Maclean Associates Ltd.
・Brenda DuBois and Karla Krogsrud Miley (Eighth Edition) (2014). *Social Work: An Empowering Profession*. Person Education Inc.
・シヴォーン・マクリーン＆ロブ・ハンソン著『パワーとエンパワーメント』木全和巳訳、クリエイツかもがわ、２０１６年

コンストラクティブ・ソーシャルワーク（Constructivism, Constructionist Social Work）

・David D. F. Fisher (1991). *An Introduction to Constructivism for Social Worker.* Praeger. Joan Laird (Editor) (1993). *Revisioning Social Work Education: A Social Constructionist Approach.* The Haworth Press.
・Cynthia Franklin and Paula S. Nurius (Editors) (1998). *Constructivism in Practice: Methods and Challenges*. Families International, Inc.
・Mary K. Rodwell (1998). *Social Work Constructivist Research*. Garland Publishing, Inc. Nigerl Parton and Patrick O'Byrne (2000). *Constructive Social Work: Towards a New Practice.* Macmillan Press, ltd.
・Stanley L. Witkin (Editor) (2012). *Social Construction and Social Work Practice: Interpretations and Innovations.* Columbia University Press.

ストラクチュラル・ソーシャルワーク（Structural Social Work）

・Colleen Lundy (2004). *Social Work and Social Justice: A Structural Approach to Practice*. Broadview Press.

・Bob Mullaly (2007). *The New Structural Social Work*. Oxford University Press.
・Collen Lundy (Second Edition) (2011). *Social Work a, Social Justice, & Human Rights: A Structural Approach to Practice*. University of Toronto Press.

クリティカル・ソーシャルワーク （Critical Social Work）

・Bob Pease and Jan Fook (Editors) (1999). *Transforming Social Work Practice: Postmodern Critical Perspectives*. Routledge.
・Jan Fook and Fiona Gardner (2007). *Practicing Critical Reflection: A Resource Handbook*.
・Jan Fook (Second Edition) (2012). *Social Work: A Critical Approach to Practice*.
・Jan Fook and Fiona Gardner (Editors) (2013). *Critical Reflection in Context: Application in Health and Social Care.* Routledge.
・Robert Adams, Lena Dominelli and Malcolm Payne (Editors) (Second Edition) (2009). *Critical Practice in Social Work*. Palgrave Macmillan.

リフレクティブ・ソーシャルワーク （Reflective Social Work）

・ドナルド・Ａ・ショーン著『省察的実践とは何か：プロフェッショナルの行為と思考』柳沢昌一・三輪健二監訳、鳳書房、２００７年（Donald A. Schön (1983). *The Reflective Practitioner: How Professionals Think in Action.* Basic Book.）
・Christine Knott and Terry Scragg (Forth Edition) (2016). *Reflective Practice in Social Work.* SAGE Publishing Inc.

文献

Aptekar, H. H. (1955). *The dynamics of casework and counseling*. Boston: Houghton Milflin.

Robert W. Roberts and Robert H. Nee (Edited) (1970). *Theories of Social Casework*. The University of Chicago Press.

Malcolm Payne (1991). *Modern Social Work Theory: A Critical Introduction.* The McMillan Press.

Malcolm Payne (3rd Edition) (2005). *Modern Social Work Theory*. Palgrave Macmillan.

Roberta R. Greene (2nd Edition) (1999). *Human Behavior Theory and Social Work Practice*. Aldine de Gruyter.

National Association of Social Workers. Barke, R. L. (Ed.) (2003). *The social work dictionary* (5th ed.). Washington, DC: NASW Press.

Francis J. Turner (Editor) (5th Edition) (2011). *Social Work Treatment: Interlocking Theoretical Approaches.* Oxford University Press.

Mel Gray and Stephen A. Webb (Edited by) (2nd Edition) (2013). *Social Work Theories and Methods*. Sage.

ロバータ　Ｒ．グリーン著『ソーシャルワークの基礎理論：人間行動と社会システム』三友雅夫・井上深幸　監訳、株式会社みらい、２００６年